

編集後記

第2期の大学評価（2011年～）

第1期の大学評価は「点検・評価報告書を中心とした書面評価や実地視察から、申請大学の教育研究活動の詳細を把握し、その質を評価」するものであった。第2期では、「教育研究活動等の詳細を点検・評価するのは、大学に委ね、学内の内部質保証システムが十分に機能しているか（それが証明できているか）を評価するものとなった。その理由としては、「点検・評価報告書の作成が自己点検・評価の目的になっていた傾向がある」との反省の上に立って、「定期的な検証システムによって、PDCAサイクルを回しておくことが必要」と判断したためのものである。

評価されたこと

「Ⅱ 総評の1 理念・目的」で「これまで一貫して、建学の精神に基づく教育理念を学内外に周知する努力をしていることは評価できる」と記されている。福音主義キリスト教に基づく女子教育、全人的な一貫教育、国際理解の教育、という建学の精神を堅持・発展させることが本学の使命であることが確認されている。

また、「Ⅲ 大学に対する提言」の中で「長所として特記すべき事項」として「学生がキャンパスを離れ、社会で自分自身を見つめなおし、現場でより高い専門性やスキルを身につけることができるプログラムが充実していることは、学部の学位授与方針の実現に向けた取り組みであり、評価できる」と記されている。この評価は国際情報学部の2つのプログラムに対してなされたものであるが、他の学部・学科においても同様の教育的試行が進められていくものと期待される。

努力課題

「Ⅱ 総評」の前書きでは、「多くの学部・学科の4年次において1年間に履修登録できる単位数の上限を設けていない点<中略>で課題が見受けられる」と記されている。

「Ⅱ 総評 3 教員・教員組織」では、「2013年度に「金城学院大学教員組織編成方針」を制定したが、当該方針と教員組織の編制実態との検証はいまだに行われていない。」として検証を行うように要請があった。

「Ⅱ 総評 7 教育研究等環境」では、「研究倫理に関しては、分野ごとの方針や規程、委員会を整備することにより対応している。研究倫理を浸透させるための研修会については、「大学FD委員会」で取り上げていくとのことから、今後の取り組みに期待したい。」と、研究倫理の浸透を進めるよう要請があった。

「Ⅱ 総評 8 社会連携・社会貢献」では、「地域貢献活動を組織的に行うための「KIDSセンター」設置計画があることから、今後の取り組みに期待したい」と記されており、地域貢献の取り組みに期待感が示された。

改善に向けて

「4年次において1年間に履修登録できる単位数の上限を設けていない」という指摘を受けて、履修支援センターでは、2016年度実施に向けて準備を進めている。

教員組織編成方針と教員組織の編制実態との検証に関しては、学長室の仕事として取り組んでいる。

研究倫理の浸透については、教員のみならず学生に対しても、学科別教育懇談会や各学部FD委員会で取り組む予定である。

KIDSセンターは2015年度4～5月に規程を制定し、活動内容や運営方針を明示し、10月より運営を開始した。

「強く、やさしく。」(点検・評価されなかったこと)

大学基準協会の今回の評価で、大学のすべての点が評価されたわけではないことは明らかである。全教員に占める外国人の割合・女性の割合、国家試験の合格率、教員一人当たりの年間の研究業績数など、枚挙にいとまがないほどである。

適合の認定を受けたが、これに甘んじることなく、「強く」生きていかなければならない。この教育スローガンは学生に向けられているだけでなく教員にも向けられていると考えたほうがいだろう。「強い」教員とは、絶えず自己批判を行い、自らの使命に背馳する姿勢や行動を諫める勇気を持つ人であると考え。「強い」教員からなる「強い」組織であることを選択したいと願っている。

感謝

大学基準協会による今回の自己点検・評価では膨大な時間とエネルギーが費やされた。ご協力いただいた全ての教職員の方々に心より感謝したい。自己評価担当・前学長補佐の浅井邦昭氏と総務部総務担当課長の置田牧人氏は献身的に作業を進められた。お二人の尽力がなければ報告書はできあがらなかったにちがいない。記して感謝申し上げたい。

金城学院大学 副学長 藤原 雅憲